

自分がBLEACHの二次創作を書くとしたら

夜想曲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

BLEACHの二次創作を書いている奴らって、多分オリジナルの斬魄刀で俺TRUE Eしたただけだろ? ……え、最近は何面組スタートが主流? あつ(察し) ふーん ……

そんな感じでオリ主とオリキャラが馬鹿やって、本編キャラとの関わりの少ない、「それ鰯でやる必要がある?」な物置です。オリ斬魄刀の紹介しかない企画ともいう。

こんな斬魄刀とかあつたらいいな! って感想があつたらコメントに …… あー、規約的に運営に叱られるから駄目か。畜生。

目次

オリジナル設定がこれでもかと溢れる尸
魂界です。 | 1

まだ愛染さんが皆殺しにする前の四十六
室です。 | 4

作中で出てない能力は捏造します。

オリジナル設定がこれでもかと溢れる尸魂界です。

護廷十三隊。BLEACH読者の皆様お馴染みのアレである。

原作ですら隊長と副隊長が割と頻繁に移り変わったり、二次創作でオリキャラ主人公が席官クラスになってたりするアレである。

一番隊から十三番隊まで存在し、「13だ?! 四天王ですら四人なのに!」「しかもそれぞれに隊長と副隊長がだ?!」このよくばりさんめ!」「隊長格以外にも強キャラが一つの隊に3人もいる! やずやですら二回なのに!!」と作者がキャラを持って余す程度には13×2+αの面々が登場キャラとして確定している。そのアレである。

しかもしかも、過去編とか踏み入って隊長格クラスを増産しやがったためさらに持て余し度合いは加速する……ワンダーワイズと戦った拳西、何処行つた? (君のような勘のいいガキは嫌いだという天の声が聞こえる)

なお、特定人数の集団でキャラを持って余すのはこの後のエスパーダとアランカルのみなさん十刃(破面10+従属官たつぷり)や滅却師連中(ボス含め26文字)でもやらかして真のクインシーとかいうボツと出速中るが、平子たちハズレ枠仮面の軍勢の10連ガチャ並の性能差に比べればまだマシな方である。

まあ、敵側の持て余しキャラは適当に処分すれば生死の判定も難しいし実は生きてま

十四番隊の遊び相手。

こんなBLEACHの二次創作があってもいいのではないだろうか？

まだ愛染さんが皆殺しにする前の四十六室です。

「鐘を鳴らせ、尸刃牙^{しぶぎ}」

一人の死神が斬魄刀を振りかざすと、その刃は瞬く間に大鎌へと変貌する。鎌の付け根には大振り以外でも鬨えるような槍のような短い刀身が付いており、柄の反対側には拳大の鐘が付いている。

その鐘を鳴らすこと二回。死神の目の前にいる虚^{ホロウ}は先程まで暴れていたにも関わらず、今では自らの運命を悟ったかのように微動だにしなくなる。

「あとは首を刈るだけ……つと、今日もつまらん仕事だ」

死神はそう独り言を呟くと横から虚の首を斬り落とす。本来なら虚が調伏・消滅した後には何も残らず、魂魄だけが尸魂界^{ソウル・ソサエティ}に送られる筈であるが――

彼が拾いあげたのは倒した筈の虚の仮面。

「こうして趣味^{あそび}を混ぜつつやらんとやってられないわー」

また彼の蒐集物は増えていく。それがどういふことを知らない時点で、彼は死神として失格であったと言えよう。

ー*ー*ー*ー

現状、中央四十六室。

「彼の者が調伏した虚が浄化され流魂街へと送られた際、精神を自失していることが判明した」

「自失した魂魄は周囲の靈魂を襲い喰らうといった通常の虚と同質の悪影響を及ぼし、現世だけでなく流魂街にまで死神を派遣する必要に迫られた」

「彼の死神の自室を調べた結果、斃した虚の仮面が完全な姿で保管されていることが判明した」

「虚の仮面は整の持つ正常な心が身体から喪われ孔となった際に変質した物であるときれている」

「直ちに仮面を斬魄刀で破壊することにより、自失した魂魄の内処分されていない者については快復が認められた」

「以上のことから、この者『きりふね 錐舟 くろし 黒獣』を死神として不適格と判断する」

「この者は直ちに斬魄刀を取り上げ蛆虫の巢へと連行すべし」

あーあ、残念だ。まだ遊べると思っていたのに。

錐舟黒獣は自らが独房に追放されると知ってからも自らの行動に微塵の後悔を抱くことはなかった。あるのはただ、もっと遊びたいという欲求のみ。

だから、連行の途中で隣にいた執行官の様子がおかしくなった時。急に襲いかかって

きたから蹴飛ばして気絶させてしまった時に。逃げ出したりせせずそのまま何らかの異変が起こつたであろう四十六室に戻ってしまったんだ。

大人しく逃げていれば、あんな化け物に出くわさずに済んだのに。その後危険人物として指名手配を受け死神どろぞくから殺される羽目になつても、そっちの方がまだマシだつたつてのに。

裁判所に戻つてしまった俺が見たのは、一人の死神が四十六室の賢者達から刃を向けられてるシーン。賢しさの欠片もなくただ殺すべき敵を見つけた獣のようにその一人の死神を見つめる元賢者達と、狂つたように嗤いを隠さないそいつ自身。

そして、「溶け混ざれ、『黒霧

「はいおしまい。それ以上やったら二度と遊んであげないよ」

突然その死神の背後から現れた人物。霊圧も威圧感もまるで一般人並だというのに、その狂人は陶器か硝子の食器を割つてしまった子供のよう^に慌てふためく。

「え、あ、これは、その」

「言い訳は聞きません。もつと自分の能力を制御できるように努力しなさい」

「やだ!!」

「あのさあ……」

「たいちよ、それよかあつち」

その一般人並な死神の反対側に、気付かなかったがもう一人。気怠げな奴が此方を見て指を指す。

「えーと、四十六室の皆さん。あれは？」

茫然自失で「私は何を…?」「何故私は鬼道を使おうと…」などと呟く面々のうち、いち早く気を取り戻した男が説明をする。

「あ、彼奴は此度の『流魂街狂人発生事案』の首謀者であつた元死神で蛆虫の…：待て貴様！何故ここに居る!？」

「多分あんたらと同じでこいつに黒霧当てられたんでしょ、連行してつた奴の方が。闘いは程遠い連中にこそこいつの能力は響く」

そして、俺を無視して説明は続く。

「だからこそ、こいつを無間に閉じ込めるわけにはいかない。正常な判断ができなくなったのはさっきので実感できただろうし、その上好戦的にする能力は閉じ込められるほかの罪人に多大なる影響を及ぼす。一齐に脱獄なんてされたら困るだろうし、こいつにはそれが可能だ」

隣で「遊んでくれるよな？な？もう遊んでくれないとかないよな？」と困り顔で懇願する少年がどれだけ危険な存在なのか、抹殺どころか無間に収容することすら火に油を注ぐに等しいと涼しい顔で説明するこの男は一体――

だから。

「こいつをうちで預かる代わりに、無間または蛆虫の巣から何人が引き抜いても構いませんか？ 逆らえないよう教育は施しますし、そっちでも扱いに困る連中は他にもいるでしょう？ たとえばそんな青年とか」

「……………は？」

俺まで危険人物側に分類されたことは、今でも疑問に思うんだ。

作中で出てない能力は捏造します。

「いやー、あつけないねー」

誰だ、これは。

「まっさか自分が最強だと思ってる奴が本当に最強だと思い込んでたなんてねー、氷チビにあんな台詞言った奴の言動じゃねーよ」

今、私は無間の最奥に収監された筈なのだが。

真央地下大監獄最下層。収監されるべき人物以外に何者かが入り込めるとは考えられないのだが。

「えーと、『あまり強い言葉を使うなよ。弱く見えるぞ』だっけ？　弱い言葉使う奴が強かった試しがないじゃん、アホかって」

そして恐らくは涅マユリあたりが開発・製作したであろう『霊圧を留める機構』とやらで私の体表面に圧縮・濃縮された霊圧を物ともせず小馬鹿にするように私の頭を何度も叩いているのだが。

こいつ、「誰だ？」……!?　1人ではないのか!?

「思考を読んで、相手の台詞と被って発語。相手がビビる。やったぜ。」

「おー、やったじやん。焼肉食べて鳴くくらいには言いたい台詞が言えて」

……幻覚を見るような疲労、だと思えば良かったのだが。頭上でべしべしと叩かれる不快さが現実なのだろうと思わせてくる。なんだこれ。本当になんだこれ。

「そーちゃん困惑気味ですし、そろそろ疑問解消してやったらどうなんです？ ミカちゃん」

「えー、ヤダ。もつと愉しもうぜ？ 尸魂界れいかいぶつ壊そうとした大罪人だし、完全にギッチギチに縛られてるから文字通り何もできねーつての」

……。「そういえば何で自分は眼も耳も霊圧知覚も封じられてるのに目の前の女2人を認識できてるのだろう、とか考え出しましたよ？ 普通に考えれば私らの仕業だつてわかるだろうに」…話が早くて助かる。

「無間のいっちゃん奥に正式に入るには殺されても文句言わない上で心臓と鍵を一体化するーんだっけ？ 2人いるのはおかしいと思つてんだろーけど、そんなの裏口造つて不法侵入はつてきたに決まつてんじやん？」

だからその方法を簡単に実現できる奴が尸魂界ソウルソサエテに存在する筈がないだろうと言つている!!……と声を大にして言いたい。

というか浦原喜助でもそんな大掛かりな改造はできないだろう？ それを簡単に裏口を造つたなどと簡単に言つてくれる……

「んーと、すこし違いますね。はい」

…違う？

「正確には、裏口を造ったというより、私達が利用してるところから裏口を造ったら、監獄の一番下に繋がっちゃうたというか。ソラちゃん的能力は私達の中でも特にインチキ臭いですから、まあ仕方ないと言いますか」

…何が言いたいのかはさっぱり分からない。だが、ホロウ虚と死神の境界を取り払ったり崩玉との融合を果たしたりと強さを求めていた自分が馬鹿になるくらいに常識が壊されていくのがわかる。

なんだこの謎の虚しさは。こんなちやらんぼらん奴等が存在していたというのか、尸魂界に？

「んーと、鬼枷…こっちの能力でアンタと繋がってるから会話できてるんだけどさ。私ら別に尸魂界の死神じゃないよ？」

「噂に聞いたことはありませんか？ 護廷十三隊に配属前の時点で普通じゃない人達ができてしまって、殺すのも封じるのも無理そうだからどうか隔離してみたって都市伝説」

「私らそれな。アンタは強さを隠してたし…そもそも拘束できちゃったからそっちは分配されなかったのかな」

…そんな噂話聞いたことは無いぞ？　なんだその出鱈目は。いや目の前のこいつらがまず出鱈目なのだが。

……は？

「いやだから鏡花水月。アンタの斬魄刀。収監の際に没収されたやつ。ウチの隊長が一応持たせとくべきだって言うから」

「感覚なさそうですけど手に握らせますね。っしょつと」

…何がしたいんだ、こいつらは。私に斬魄刀を？何故…

「タイチヨから伝言。卍解の能力って始解で見せてる催眠を現実の上書きしたり出来ます？　とりあえず卍解できなくしておいたのもう一度しっかり刃禪したげてくださいねー。キョーカちゃん可哀想だよ？　だつてさ。そいつ女なの？」

…その伝言を境に、全ての感覚が再び喪われた。

…否、鏡花水月を取り戻したことで斬魄刀の世界に没入することは出来そうだ。

とりあえず、次に誰かがやって来るまでは、鏡花水月と対話しながら時間を潰すとしてよう。夢想するよりも、対話する方が有意義だろうし、あの二人が何者かを聞き出さねばならない。

卍解できないように、という言葉が『鏡花水月がどうしても屈伏しないようになって

いた』と知るのは少し先の話である。